



つぎはぎ

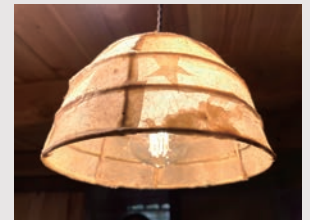
つぎはぎ農園 日記

朽ちかけた蔵を民泊スペースに改装した直後に到来した with コロナ時代。戸惑いながらも、うち時間にやりたかったことができました。

その一つが、わが家の畑で育てた青大豆で味噌作り。この青大豆、猛暑にも豪雨にも負けず、たくましく育ってくれる子で、3年前から種(というか豆)とりして大切につないでいます。枝豆は濃厚な味わい。たくさん食べました。種まきの時期には「つぎはぎ」web サイトのショップでも少し販売しました。続けていきたいな。



味噌作りのため大豆を薪ストーブで煮る



体験に来た6歳児とお母さん合作

もう一つが、萩の竹を発酵させて作る竹紙のランプシェード作り。不器用でも、子どもでも、大変味わい深い一生モノのランプシェードを作ることができました。この体験は随時受け付けています。「竹紙ランプシェード」で検索してね！

2020年の夏、はじめて蔵に泊まったお客さまは、農泊受け入れ家庭仲間で松陰神社の近くで民泊を営む吉津さんファミリー。冬には『つぎはぎ』創刊時にお世話になった東さんファミリーが泊まりに来てくれました。うれしかったな～。

ご縁に感謝。



屋根裏部屋のような
宿泊スペース

@OFP_HAGI



Contents

生まれ育った場所の風景を再発見～乗旅in大井～ p2

萩の風景とその向こう側にあるもの p5

そこにあるスタンダード p7

萩の日常を思う p13

あたらしい風景をつくるひと p15

乗旅 in 大井

生まれ育った場所の風景を再発見

萩市街から車で15分ほど。海沿いの国道191号線を走ると太古の息吹が残る「大井」へ。
ここで育った2人が、夏みかん色の原付バイクに乗って思い出の風景を再発見する旅へ出かけた。

うやま 鶺鴒山のグロ



鶺鴒山は約6万8000年前に噴火した火山。柑橘畑が広がる鶺鴒山の一帯に、この不思議な石積み（グロ）はある。元寇のときの防塁説が伝わっているが、日本書紀に出てくる幻の城「長門城」ではないかという見方もある。大陸に近いこの場所は、「城」としてつじつまがあいそう!? 歴史ロマンが広がる場所なのだ。



クヌギの木を探して、
カブトムシを耳当てた!

おの たつや
小野竜也さん

1976年生まれ。港（海側）出身。姉と妹がいる。18歳で萩を出て、神奈川や東京で販売の仕事に従事。27歳でUターン。ホテル、ホームセンター勤務を経て、飲食店で働きながら、仲間たちとの乗旅やイベントを企画し、はじける日々を送る。



小学生の頃、
ここで走り回ってた!

いとう ゆり
伊藤由利さん

1998年生まれ。坂本（山側）出身。四姉妹の末っ子。屋根の上で鬼ごっこしたり、ヤンチャな幼少期を過ごす。高校2年生で「はやく大人になりたい」とマジメに勉強するようになり、現在は市役所勤務。



鶺鴒山の噴火により溶岩が固まってできた岩場

おうのまつばら
阿武松原

2人が通っていた保育園の近くの砂浜



港

表札を見てビックリ。この地区は「古谷さん」だらけ。
小野さんの家はこの近く



港から近い鶴山の道は、樹木のトンネルが心地よい

神奈川県の茅ヶ崎で販売の仕事をしていた19歳の時、母が46歳で亡くなって、「人って死ぬんだな」と。それから有限の時間、挑戦することに向き合った。当時、バブルが弾けて景気が悪く、会社は転換期。でも、上司に恵まれ、若手の活躍が求められて、がむしゃらに働いた。いい勉強になったかな。その頃から、パニック障害に。ダムが崩壊する感じで不安が押し寄せてくる症状は10年くらい続いた。27歳のとき、萩に帰ってきたら、時間がゆっくり流れていて、自分で行動を変えて、はじけるようになったら、精神的な問題はどうかできるようになっていた。海の近くで生まれ育ったけど、山が落ち着く。近い将来、母の出身地・萩市川上の山の中でカフェをやりたいな。





さかせとのたま

坂本滝

竹林を抜けると、目の前にハッと息を飲むような美しい世界が広がる。小さな滝と静かな水面に映る木々が美しい。水の音と鳥のさえずりだけが聞こえる、静謐な空気に身を委ねていると、珍しい鳥が、飛んでいく。ここだけ異世界のような感じ。



詳しい道順>>



東萩駅近くにあるバイク屋さん「バイクハウスオータニ」の原付レンタルサービス「乗旅」を利用しました。

<乗旅のおとせ>
大井おたからマップ



萩の外に出たいという気持ちもあった。でも、外に出ずに社会人になって、自由に表現してやりたいことをやっている人たちと出会って、「何でもできるんだ」って思えるようになった。



あちこちに柑橘畑が広がる



夏は田んぼ、冬は玉ねぎ畑の二毛作



萩の風景とその向こう側にあるもの

萩まちじゅう博物館では
萩らしさ・その地域らしさを作る文化遺産を再発見し
「萩のおたから」と名付け
守り、育て、生かす取り組みを進めています。

このリトルプレスは、その取り組みの一環で制作しました。

萩のおたからは
著名な歴史にまつわるものだけではありません。

人々の日々の暮らしの中で
知恵や工夫を重ねて生み出されてきたものや
変化しつつ受け継がれてきたもの。
あたりまえのように存在するけれど
失くしたり離れたりするとその大切さがわかる
「おたから」がたくさんあります。

そして、そのおたからは
単に保存することだけが継承の手段ではありません。

積極的に紹介され、活用され
あるときは新しく作られるもののモチーフになり
現代の人々の暮らしの中で生かされていくことこそ
最大の継承の手段であると考えます。

今回のテーマは「萩の風景とその向こう側にあるもの」です。

萩のさまざまな風景と、それを守る人や慈しむ人
現代の感性で楽しむ人
古いものを活かして新たな価値ある風景をつくる人などを
つぎはぎ編集部が集めました。

この冊子を手にとってくださった方には
いつの日か萩を訪れていただき
風景を楽しむと共に、その向こう側にいる人にも出会い
萩のおたからに触れていただければ幸いです。



菊ヶ浜

Kikugahama



萩市東浜崎町～堀内

そこにあるスタンダード

あなたの好きな風景には、欠かせない人たちがいます。
たゆまぬ日々と、美しさよ。ありがとう。

菊ヶ浜を日本一美しくする会



「赤木さんという人が一人で清掃していた菊ヶ浜を、有志でやろうと 2003 年の秋に結成した、通称『菊一の会』。1 年もせんうちにハマってしまったんよね。汚れた浜がきれいになった後、一服した時の気持ち良さ。来た人が『きれいよね』と言ってる声が聞こえると、本当にうれしい。いろいろ地域のこやってきたけど、僕のボランティアはこれが最後。誰かのためというより自分のため。義務感も少しはあるかもしれん。何かが背中を押す。継続の大切さは分かっちゃう。僕らの背中を見て、続く人が出たらいいと願ってる」。TEL.0838-25-5360



城下町と人力車

Castle Town & Rickshaw



萩市・萩地域

中原省吾さん

Shogo Nakahara



「生き方に迷いが生じた 20 歳ごろ、手にした本の 2 ページで涙し『歩くことをやろう』と日本一周に旅立ちました。が、達成直前に焦燥感。すごく求めてた時期だったんですね。見つけたのは、人力車。24 歳、日比野公園→博多→萩へ向かい、車を引くことが日常となりました。萩には古くて変わったものが多く、当初は旅行者のように楽しんでいました。橋本川そばの松の木陰で昼寝をしている老夫婦を見た時、観光地だが観光地ではない町の厚みに感動しました。来年、車夫歴 40 年。環境を整えば、24 時間^{たてば}立場に立っていたい」。TEL.0838-26-6474



むつみひまわりロード

Mutsumi Sunflower Road



萩市高佐下 2674-76

大田直志さん

Naoyuki Ota



「旧むつみ村時代に、全戸にひまわりを植える保健推進事業を進めよったんです。結果ひまわりが村のシンボルになり、1991年には現在の地に『健康いきいきひまわりロード』が完成。絶景が評判を呼び、それまで1次産業の地だったむつみで初の観光事業が着手されたんです。今は、人口1300人余り。夏の風物詩に育て交流人口と活気を生みたいと栽培を引き継ぎ、2年前には96000人が来てくれました。一人でやるにはプレッシャーもある。ですが、自分が手掛けた事業から生まれたひまわりロード。自分の仕事として生きがいを感じています」。TEL.08388-6-0211





萩市東田町171

冬の記憶

「今年もこの季節が来たな」
冷たく乾いた風が吹き始めると
毎年、楽しみにしていることがある。

それは、萩の街の中心地。
赤と白の可愛らしい屋根と

犬判焼^{いぬばんやき}の赤い提灯が目印の場所。

「あずきあん和白あん2つずつ。

あと、カスタードクリームも！」

つついたたくさん買っちゃって、

近所におすす分けするのもいつものこと。

ホクホクの大判焼を頬張ると

溢れ出しそうなほどギョツと詰まった

餡が染みて、心が満ち溢れそうになる。

はっきりなしに地元の人が訪れる

地元の名店・小林製菓の大判焼は、

今年の冬も萩の記憶を彩っていった。



秋中今魚店町46-2



週末のルーティーン。
それは、食材の買い出し。

かつての城下町の中にあるこのスーパーは、
見た目が景観に優しい。

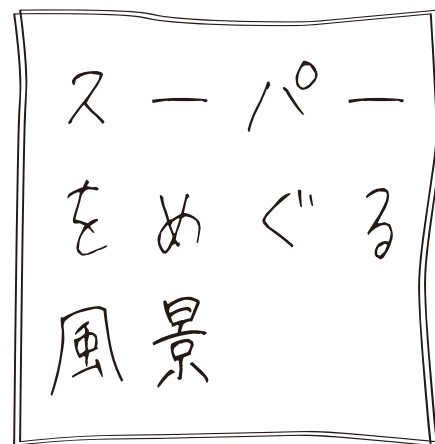
黒い屋根に白壁、なまこ壁のモノトーン
自販機だってシテイブラウンでシックに。
ロゴの赤色も渋めで、なんだかおしゃやれ。

店内に入ると、すぐに秋野菜コーナー。
10歩も進まないうちに
買い物かごは満杯になる。

あの農家さんがつくった野菜。
あの畑でつくられている野菜。
農家さんの顔や畑の風景が思い浮かぶ。

どんな想いで、どんな工夫をして、
野菜たちが作られているか。
それが伝わってくるから、
安心して買える。信頼して選べる。

わたしの週末の買い物は、
この風景に支えられている。





12/19の「ハマサキコーヒーボーイズ」では、コーヒーを通じた幸せを伝える知識と技術を身につけた2人の大学生が、コーヒーやワッフルを提供。キッズドリンクメニューも忘れられない優しさで、彼らを応援する地元のおばあちゃんや出身高校の先生たちとの会話に温かさを感じた



あたらしい 風景を つくるひと

冬のある週末、古い町家が建ち並ぶ浜崎重要伝統的建造物群保存地区の一角に、あたらしい風景が生まれた。挑戦する人、後押しする人、誰かと誰かをつなぐ人、応援して自らも元気になる人、その挑戦が生む価値を受け取り笑顔になる人。そんな人々が集まった2つのイベント「ハマサキコーヒーボーイズ」、「salad bowl day」。まちが積み重ねてきたものを現代のセンスで生かした「あたらしい風景」の向こう側にある人々の想いや気づきを伺った。



12/20の「salad bowl day」では、秋高校3年生の生徒が「秋野菜を美味しくお洒落に食べよう！」をテーマに、彩り鮮やかな秋野菜のサラダボウルとオリジナルドレッシングを販売。店の前には行列ができ、彼女を支える大人たちもお客さまも、みんな笑顔になった



会場となったのは、浜崎地区にある旧三浦金物店。古い金物店の建物をリノベーションし、キッチンや図書室を備えたイベントスペースとして2020年春にオープン。以来、1日限定のおむすび屋さんや雑貨店のポップアップショップ、学生によるワークショップなど、様々なイベントが催されている

萩は逆につくれるチャンスがある 何かを提供するおもしろさを体験

新) 萩未来塾*1で親しくなった吉田さんと一緒に、周南市のCOFFEEBOYでスカラシッププログラム*2のことを聞いたのがきっかけ。吉田さんがいたから「よし、やってみよう」となりました。中学からの友人で、スタバでバイトをしていた凌平も誘いました。

コーヒーを販売するのに、せっかくなら新しい風が吹くリノベーションされた場所でやりたいな、と、旧三浦金物店の雰囲気の魅力を感じて選びました。このイベントが浜崎を知ってもらうきっかけになれば、というのも考えていました。

凌平) ワッフル「浜崎美人」は、コーヒーだけだとさびしいよね、となって「浜崎のおばちゃんがイベントで作るワッフルもいいんじゃない?」と、吉田さんが地元の方に話を持ちかけてくれました。ワッフルも一緒に出すことで、おばちゃんたちも来やすくなったと思うし、それも雰囲気づくりには大切だったと思います。

新) 当日は、浜崎のおばちゃんたちがコーヒーを片手に交流する場が見られて、それがめっちゃめっちゃうれしかった。大きく言えば、コーヒーを売るだけじゃない、浜崎のまちを盛り上げる1日になったと思います。それも、浜崎に昔からある建物だから、アットホームでリラックスした感じが出たんじゃないかな。

自分が通う学部のもットーに「なければつくればよい」というのがあって、まさにそのとおりだなと思っています。萩は都会に比べれば新しいものはないけど、逆につくれるチャンスがある。コンテンツを提供する側になれるまちだなんて、かなりポジティブなイメージになりました。

凌平) これを他の萩出身の大学生にも波及させたいです。自分たちのことを事例に「何かしてみない?」って聞いてみたい。一度でいいから何かを提供するおもしろさを体験してほしい。そんな学生や若者のイベントが増えたら、萩にまた戻ってきて、そこで活躍したいっていう人も増えると思います。



挑戦したひと①
ハマサキコーヒーボーイズ
いよおか りょうへい なかつえ あらた
伊豫岡 凌平さん 中津江 新さん



新さんデザインの
イベントポスター



学生を応援してくれるまちなんだな と、萩をもっと好きになりました

友人と遊びに行った大阪のサラダバーは、彩り野菜やドレッシングが豊富で、それが楽しくて、「萩にあったらいいな」と思ったのが発端。その時は自分でやろうという思考はなかったけど、「やろう」となったのは、萩未来塾がきっかけです。

畑を訪問して話を聞く前と後では、野菜がぜんぜん違って見えます。例えばある農家さんは、フットサルのコーチとして成長期の子どもたちと向き合うのに、あまりいろいろ言わず優しく見守って自分たちで気づかせている。その考え方が野菜づくりにも通じていて、あまり手をかけすぎず海のミネラルや山の空気など自然の力と一緒に育てている。その感じがいいと思いました。話を聞くことで、もっとその人の野菜を食べたくなるし、より魅力的に見えるようになる。それも萩の人に伝えたいと思いました。

チラシのポスティングでは「何を配ってるの?」と声をかけられて、「こういうことをやるので来てください!」と言うと、みなさん、笑顔で「がんばってね!」「行くね!」と言ってきて。声をかけてくれる時点でうれしいし、学生を応援してくれるまちなんだな、と萩をもっと好きになりました。通ったことのない道も、友人と2人で回って「こんな場所があったんだ!」と探検みたいで楽しかったです。

当日は、たくさんのお客様が来てくれて、短時間でも、ひとりひとりとコミュニケーションがとれて、温かい気持ちになりました。友達や大人の方の協力には本当に感謝しかなくて、いろんな人に支えてもらって「あ、できるんだな」というのを実感しました。最初はやるかやらないかさ迷っていたけれど、なんでもチャレンジしていいんだと吉田さんや父に言われて、一歩踏み出してよかったと思います。自分も成長できたし、自ら積極的にやることの大切さや、人との関わり方、伝え方など、多くの気づきのあるイベントでした。



母からヒントをもらって、
ちぎり絵で野菜を表現した
イベントポスター

挑戦した人②
salad bowl day
しば まさき
馬場 雅季さん



*1 みんながつくる萩未来塾

萩のことを知り、萩の未来を自分たちで考えようと2020年夏にスタート。高校生や大学生、20代の若者などが、自分のできること・やりたいことを発案しあう場。ヨシダキカクの吉田さんがその発起人のひとり。

*2 Coffeeyoy Scholarship コーヒーボーイ スカラシップ

山口県内で自家焙煎コーヒー店を展開するCOFFEEBOYによる奨学生制度。奨学生がコーヒーについて学び、知識やドリップの技術を身につけ、実際に販売。その利益が奨学生に還元される。ハマサキコーヒーボーイズは第0期生。

地域が応援するポジティブな雰囲気のところ に、外の人に来て楽しむ。両方が大事

学生たちと出会ったきっかけは、萩未来塾です。新くんなかつとの父親で、浜崎地区にある住吉神社の宮司である中津江瑞穂みずほさんに「松下村塾みたいなことをやりたい」という思いがあって。それを形にして「過去から学んで、今を知って、未来を考える」ことをやろうと、萩未来塾を開催することに。その立ち上げメンバーの1人が新くんなかつとで、雅季さんも参加者として来てくれました。

萩未来塾も今回のイベントも、そこに至る経緯や人との出会いをたどると、とても不思議。簡単には何事も出来上がらない。地域おこし協力隊として活動を始めた4年前ぐらいから、「おもしろそうだな」「話を聞きたいな」と感じる人がいれば、自ら動いて会いに行って、話すことを大事にしてきました。そうして培われた人間関係や信頼関係が引き合わせてくれたものだと思います。

有志でのポスティングやワッフルづくりなど、浜崎の人たちが応援するポジティブな雰囲気があるところに、外の人に来て気持ちがいいと感じる。やっぱり両方あることが大事だなと思います。だからこそ、地域の人に何をやっているかを理解してもらう活動もしています。その場所で何かをやることは、その地域の人たちが守ってきた場所でやらせてもらうことだから。大事にしたいです。

地域で挑戦する人が増えてほしい。そのためにも、旧三浦金物店のような、ハードウェアとしてのいい空間とソフトウェアとして挑戦できるしくみのある場所が、いろいろな地域に必要だと思います。例えば、公共的な建物にキッチン、コワーキングスペース、ギャラリーを備えた、もっとオープンに使える場所がほしいし、そこにはコーディネーターの存在も必要。その役割を各地の地域おこし協力隊が担ってほしいと思います。

萩市インキュベーションセンターを運営。
人をつなぎ、背中を押す仕掛け人

よしだ ともひろ
ヨシダキカク 吉田 知弘さん



挑戦する場として選んでもらえて、 すごくうれしい

旧三浦金物店をつくっている時から、チャレンジしてみたいという「想い」のある人に使ってほしいと思っていたので、最初にお話をもらった時、本当にうれしかったです。それに、まちの人にもそういう場として理解してもらえる機会になると思いました。

馬場さんが打合せに来た時に、「イメージが湧いてきた！」とその時点で楽しそうにしている姿を見て、こういう体験が学生のうちにできるというだけで、すごくいいことだな、ちょっと羨ましいな、と感じました。

イベントをきっかけに、萩の人にも「今まで浜崎に来たことなかったけど、いい町並みだね」と言われることが増えました。イベントスペースとして旧三浦金物店があることによって、新たな魅力のある「まち」として認識してもらえてよかったです。今回は特に来てくれる人の世代の幅があって、萩で育った学生さんが主催するイベントならではの人の集まり方だなと感じました。

建物をリノベーションする時には、できるだけ元の形を生かして前につくった人の想いを残しながら、今の人たちが触れやすいように編集していくことを意識しました。かつての金物店の姿を知る、地元浜崎のみなさんも協力的で、興味を持って見学してくれたり、イベントにも喜んで来てくださったり、本当に感謝しかないです。

これからも、いろいろな使い方をしてもらって「あの場所に行ったら、何かしらおもしろいものがあるよね」という場にしたい。町並みを残すだけでなく、人が行き交う姿があるからこそその「まち」として盛り上げ、「萩に行ったら、ぜったい浜崎に行くべきだよ」と思ってもらえるようにしていきたいです。

旧三浦金物店をリノベーションして、
挑戦できるイベントスペースとして運営

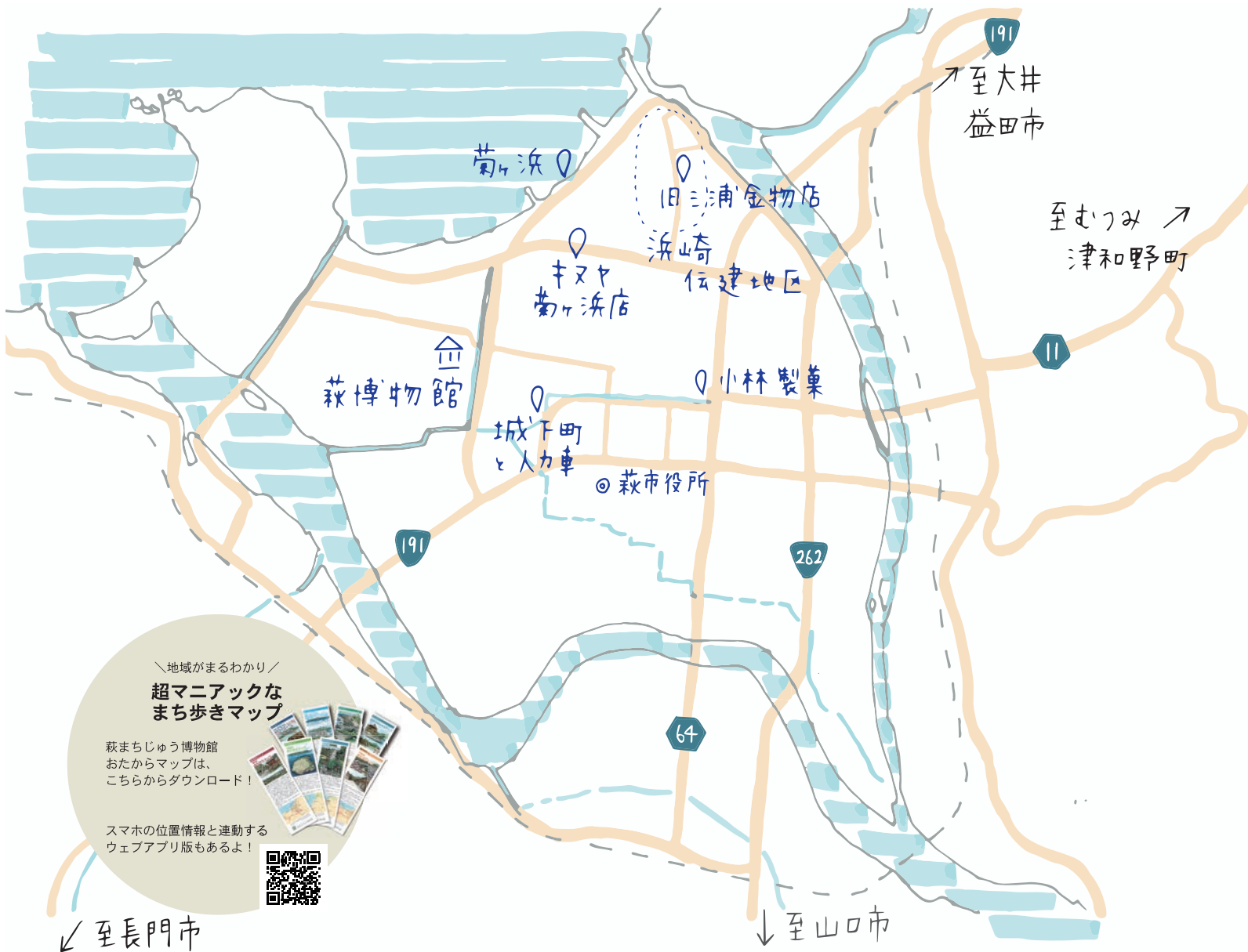
おがわ ゆうこ
はぎ地域資産株式会社 小川 優子さん



Let's Try!! 挑戦してみたい、と思ったら・・・

いろんな人に挑戦してもらいたい、という思いから、旧三浦金物店の使用料は、トライしやすい価格になっている。期待する利用方法は、「飲食でも物販でも、誰かが来て楽しめるもの、みんなも巻き込んで楽しめることをやってほしい。ワークショップもOK」とのこと。詳しくは、旧三浦金物店のInstagramのDMを通じて、こんなことをやりたい！と思いを伝えるところから始めてみてはいかがでしょうか？ @miurakanamonoten_hagi





＼地域がまるわかり／
超マニアックな
まち歩きマップ

萩まちじゅう博物館
おたからマップは、
こちらからダウンロード！



スマホの位置情報と連動する
ウェブアプリ版もあるよ！



＼至長門市

↓至山口市

つぎはぎ vol.4

2021年3月26日発行

企画・編集 つぎはぎ編集部

発行 萩まちじゅう博物館
文化遺産活用事業実行委員会

〒758-0057 山口県萩市堀内355番地
(萩博物館内)

つぎはぎ編集部

石田 洋子、河津 梨香、松田 澯衣菜、山本 明日美

ロゴ 齋藤 奈保子 Instagram @midorikotty

Special Thanks 本誌の制作にご協力いただいた皆さま

<https://tsugihagi.info/>

[tsugihagi.mag](https://www.instagram.com/midorikotty)



令和2年度文化庁文化芸術振興費補助金
(地域文化財総合活用推進事業)



Agency for Cultural Affairs, Government of Japan



Hagi Machijyu Hakubutsukan
萩まちじゅう博物館





Vol. 4